

## 研究報告

# 明治維新から第一次世界大戦までの 日本メソジスト教会の苦闘

野村 誠

### (1)

明治維新前の日本は鎖国していたが長崎の出島を通じて、オランダ、中国からしっかりと国際情報を収集していた。鎖国状態とはいえ、ウサギの耳のように自己の弱さを情報収集で補っていた。日本にとって偉大な清帝国が英国によりアヘン戦争で、占領され、搾取されたことは大変な衝撃であった。アヘン戦争は、1840年—42年、1856年—60年の二回が記録されている。アヘン戦争の原因は、中国の指導者たちが、英国によるインドからのアヘンの輸入を禁じたことに起因する<sup>1</sup>。一方日本の指導者たちは先進国が軍事的に中国を占領することで、先進国を恐れていた<sup>2</sup>。

1853年、マシュー・ペリーがアメリカから日本に來日し、クジラ捕鯨船に対する燃料・水・食糧供給のためにドアを開けるよう要請した。当時日本は、1633年以来中国とオランダ以外に対しては鎖国政策をとっていた。明治維新(1868年)では、日本の指導者たちは日米和親条約(1854年)を締結した。続いて日英和親条約が結ばれた。その結果、先進国との不平等条約締結によって日本人は苦しむことになった。当時、日本人は、攘夷という言葉に象徴されるように、外国人嫌いであった。なぜなら200年以上の鎖国政策、日本人はキリ

---

<sup>1</sup> 半藤一利『幕末史』新潮出版、2013年、29-34頁。

<sup>2</sup> 加藤祐三『黒船前後の世界』筑摩書房、1994年、290-319頁。出口治明『仕事に効く教養としての「世界史」』祥伝社、2016年、307—311頁。

スト教禁教を 270 年以上( 1587－1873)命じられていた, なぜならキリスト教は邪悪な宗教とみなされていたからです。

1825 年、『新論』が会沢正志斎によって出版された。この本は、インドが英国によって征服された、次は中国であり、そして日本であると唱えられた。

“The New Theory” (新論 *Shin Ron*) was published by Seishisai Aizawa (会沢正志斎) in 1825, in Japanese. This book spoke of India being conquered and subjugated by Britain. Then, the next objects would be China and after that, Japan.

(2)

その帝国主義ゆえに日本人は白人を恐れた。白人優越主義と人種差別は米国、英国、フランスの重要な思想であることを認識していた。しかし、日本人が最も恐れていたのは、ロシアであった、なぜなら約束を守らず信頼できないからであった。注 1 の地図に示されているようにロシアは 1792 年から日本に港の使用と開国を求めていた。しかし日本はロシアの要求を拒否していた。注 1 図

先進国は日本に侵略し、人民を神の愛と隣人への愛を教えつつキリスト教によって支配すると考えた。かくして日本人は彼らの偽善性を疑い、日本人はその状況に混乱した。

当時の状況は、弱肉強食のジャングルの掟、強者が弱者を餌食にする法則であった。

日本人はキリスト教文化や西洋文化を好んだ、しかしキリスト教信仰を恐れた。日本人指導者はアヘンとキリスト教を恐れた。両方とも同じものとみなされた。このことは、いまでも続いている。<sup>3</sup>③

多くの人々は日本は近代的兵器と産業で強力な国家を建設せねばならないと考えた。

---

<sup>3</sup> 古屋安雄・大木英夫著『日本の神学』ヨルダン社、1989 年、91－92 頁。 .

それゆえ日本政府は日本を近代国家へと建設すべく努めた。つまり殖産興業、富国強兵策であった。もし日本が近代国家にならなければ、白人に日本人は殺されるか奴隷にされただろう。当時ダーウィニズムのゆえに、日本人は劣等人種「黄色いサル」として動物とみなされた。

このころ生麦事件(Richardson Affair, 1862)が起きた、英国人リチャードソン(Charles Richardson)が殺害され他の二人は傷つけられた。<sup>4④</sup>

リチャードソンは、身振り手振りも含めて中止を命じられていたにもかかわらず薩摩藩主島津久光の大名行列の前方より、馬に乗って乱入し彼は殺された。結果として、日本はイギリスの判決により巨額の賠償金を要求された。英国の水夫たちは多額の金を手に入れたが、あまりの重さに軍艦は沈みだし、その金のいくつかを返却した。これは英国との不平等条約の結果の一つであった。さらに馬関戦争(1864年)では多額の賠償金を支払った。

しかし、生麦事件の巨額賠償金を約束どおり支払おうとした日本人に対して英国は日本人は武士道精神(ビューリタニズムのエートスと似ている)を持っていると評価した。筆者から見れば、神と人との契約を尊重する日本人に敬意を表したと思われる。

日英和親条約は1902年日本と英国の間で締結された。しかしこの条約のおかげで日本は、日露戦争(1904-5)での勝利を手に入れた。

英国は複雑な国際社会の荒波の中に船出した無知な日本を助けてくれた。結局日本は、英国に助けられて問題だらけの困難な国際関係を克服することができた。特に日本はロシアの日本領土を狙った南下政策を恐れていた、英国はロシアとの戦いで日本を助けてくれた。

1899年、日露戦争に勝利し不平等条約を改定した。この経験は日本に戦争

---

<sup>4</sup> 城田精一訳『一外交官の見た明治維新』岩波書店、1960年。

(Sir Ernest Mason Satow, A Diploma in Japan—Autobiography. 1921.) KODANSHA ENCYCLOPEDIA of JAPAN, 1983.

に勝利するならば、不平等条約を改正し平等条約となすことができるという確信を与えた。

かくして、世界は戦争の勝利のゆえに日本をと認めた。さらに戦争の勝利は日本社会に多くの利益を与えた。

日本メソジスト教会初代監督、本多庸一(1849-1912))は、国家の軍国政策を支持したので、日本メソジスト教会は第一次大戦に参加した。彼の政策は弟子によって継承された。<sup>5</sup>

日本人は、200年以上続いた鎖国政策やキリスト教禁教政策(弾圧)のゆえに政府に従順である。結局、日本人はキリスト教信仰を恐れてきた。

1921年日本の天皇となる裕仁(1901-1989)が、英国を訪問したとき英国の人々から大変歓迎された、それ以来日本人は英国に親愛の情を持っている。自分たちを紳士として扱ってくれたことに感謝した。

## Books

城田精一訳『一外交官の見た明治維新』岩波書店、1960年。

(Sir Ernest Mason Satow, A Diplomat in Japan—Autobiography. 1921.)

加藤祐三『黒船前後の世界』筑摩書房、1994年。

気賀健生『本多庸一』青山学院、1968年、208-228頁

古屋安雄/大木英夫著『日本の神学』ヨルダン社、1989年、91-91頁。.

古屋安雄『なぜ日本にキリスト教は広まらないのか』教文館、2009年

半藤一利『幕末史』新潮出版、2013年、29-34頁。

出口治明『仕事に効く教養としての「世界史」』祥伝社、2016年、307-311頁。.

---

<sup>5</sup>気賀健生『本多庸一』青山学院 1968年 pp.208-228

KODANSHA ENCYCLOPEDIA of JAPAN, 1983.

注1 図 日本の港の使用・開国を迫った動き



ロシアは、1792年から日本に港の使用を求め、開国を求めていた。

(共愛学園 前橋国際大学)